

出品目録

1、

(印)

経_レ孝靈皇第五年_ヲ孝靈皇第五年を経て
名山湧出_ス駿中天_ニ名山湧出す駿中の天
玲瓏_タ八朶千秋雪_ニ玲瓏たる八朶千秋の雪
照到_ス紅洋黒漠_ノ邊_ニ照到す紅洋黒漠の邊

富嶽 枕山叟(印)(印)(印)

2、

(印) 澆_レ花_ニ拭_レ竹_ノ閑中_ノ課_ニ 单山(印)

鷗客散人生(印)

晴湖女史作_ス雲根玉_ニ(印)

出俗_ノ佳人_ノ 敬答是(印)

(印) 静中一脈香纒_ニ動_ス 先向_ニ幽人_ノ鼻歛通_ス
臚元邦(印) (中下左)

我素人重意

(中下中)

(上左)

(上右)

(中上左)

(中上右)

洛浦佳人環珮冷 湘川帝子夢魂香

雪江関々敬(印)(印) (中下右)

千古松篁如伯仲 一江烟月又黄昏

枕山僊史(印) (下右)

柳圃(印) (下左)

3、

薰風解温至天涯 薰風温を解いて天涯に至り

况爾深春氣候嘉 況んや爾深春の氣候嘉なるをや

謀會大樓開大會 謀りて大樓に会して大会を開き

文華繁事見繁華 文華の繁事繁華を見はす

詩歌俳句多千像 詩歌俳句千像多く

書画琴棋有百家 書画琴棋百家有り

南北東西期此日 南北東西此の日を期し

汽車賓後又人車 汽車の賓後に又人車あり

森田友昇翁以今茲四月念二日

開文雅大筵賦此贈之 梅花平寶

4、

森田友昇画像 天野佐一郎賛

5、

(印)

箇、老人星杖、杖、輕、
箇の老人星杖を曳きて軽く (寿老人)

矮然、福祿、貌相、并、
矮然たる福祿の貌相ひ并ぶ (福祿)

大神、椎、畔、多、祥氣、
大神の椎の畔に祥氣多く (大黒天)

天女、絃、邊、足、喜聲、
天女の絃の辺に喜聲足つ (弁財天女)

短柄、釣資、肥鬚、躍、
短柄の釣資に肥鬚躍り (恵比須)

長槍、護法、惡魔、驚、
長槍の護法に惡魔驚く (毘沙門天)

善他、布袋、間、和尚、
善きかな他の布袋の間の和尚 (布袋和尚)

聚、得、兒童、幾、咲、成、
兒童を聚め得て幾の咲を成す

七福神篇 枕山叟(印)(印)(印)

6、

(印)

湖烟破^や処^ち石橋横^り

湖烟破るる処石橋横はり

漁屋参差^{しんし}落^り照^り明^か

漁屋参差として落照明かなり

手^て到^り倪^げ迂^う難^し写^す所^し

手は倪迂に到るとも写す所難し

(倪迂は元の画人)

一隄^い黄樹^{わうじゆ}鴈^う飛^ぶ声^す

一隄の黄樹鴈の飛ぶ声す

湖堤夕陽

枕山

(印)(印)(印)

7、

(印)

商女^{しやうにょ}家^け臨^み宿^{しゆく}鴈^う洲^{しゅう}

商女の家は臨む宿鴈の洲

只^{ただ}因^り高^か下^げ累^れ喧^{けん}幽^{ゆう}

只高下に因りて喧と幽を累ぬ

案^{あん}絃^{げん}賜^{たま}燭^{しやく}纒^ひ過^り暮^ぼ

絃を案じて燭を賜ひ纒かに暮を過ぎたり

敗^{さい}柳^{りゆう}枯^か荷^か尚^{なほ}衷^{ちゆう}秋^{あき}

敗柳枯荷尚秋を衷む

欄^{らん}外^{がい}煙^{えん}陰^{いん}佳^か景^{けい}没^{ぼつ}

欄外の煙陰に佳景没す

盞^{さん}中^{ちゆう}霞^か暈^{うん}艷^{えん}容^{よう}浮^ぶ

盞中の霞暈に艷容浮ぶ

歡_レ筵_ヲ探_ル借_ル鶯_ノ花_ノ候
歡筵に探り借る鶯花の候
衰_レ老_何辭_ヲ爛_レ熾_ヲ游_ビ
衰老何ぞ辞せん爛熾の遊び
桜_ノ所_君招_キ飲_ム於_湖樓_ニ次_ヲ韻_ヲ
枕山(印)(印)

8、

(印)

喔_々雲_中雞_鳴
喔々たる雲中の雞

青_山淡_く欲_し曙_ヲ
青山淡くして曙けなんと欲す

應_ニ越_ス前_夜期_ニ
應に前夜の期に越くべし

幽_人抱_キ琴_ヲ去_ル
幽人琴を抱きて去る

洞_門窈_窕深_し
洞門窈窕として深し

花_ハ擁_ス水_窮處_ニ
花は擁す水窮る處

訪_レ友_ヲ 枕_山
枕山(印)(印)

9、

(印)

遠_ク向_キ難_波駐_ム軸_艦
遠く難波に向ひ軸艦を駐む

拾_テ除_キ宮_賊定_ム中_区
宮賊を拾除して中区を定む

須^ス知^ル真^{マコト}箇^ノ天^{アメノ}孫^ノ貴^キ 須^ス知^ル知^ルるべし真^{マコト}箇^ノ天^{アメノ}孫^ノの貴^キなるを
照^ス路^ノ前^ノ軍^ヲ有^リ日^ノ鳥^ニ 路^ノを前^ノ軍^ニに照^スらす日^ノ鳥^ニ有^リ

神武天皇 枕山(印)

10、

(印)

驚^{オドロ}見^ル王^ノ旗^ヲ賊^ノ裏^ニ愁^ム 驚^{オドロ}き見^ルる王^ノ旗^ヲ賊^ノ裏^ニの愁^ムひ
搏^ウ人^ヲ奪^ヒ取^ル錦^ノ連^ノ翩^ヲ 人^ヲを搏^ウち奪^ヒ取^ルる錦^ノ連^ノ翩^ヲたり
欲^ス失^ハ之^ヲ子^ノ功^ヲ勞^ヲ重^ク 之^ヲを失^ハはんと欲^スすれども子^ノが功^ヲ勞^ヲ重^クく
日^ノ月^ノ雙^ノ輪^ヲ擔^リ在^リ肩^ニ 日^ノ月^ノ雙^ノ輪^ヲ擔^リいで肩^ニに在^リ

村上義光 枕山僊史序(印)

11、

(印)

雨^ノ後^ノ書^ノ堂^ノ暑^ク半^ク旬^ニ 雨^ノ後^ノの書^ノ堂^ノ暑^ク半^ク旬^ニばの旬^ニ

当_レ軒_ニ碧_ク樹_ノ秀_ニ千人_ノ一_ニ
咲_ニ吾_ガ詩_ノ学_ヲ渾_ニ仍_レ旧_ニ
不_レ蕉_ク心_ノ日_々新_{ナリ}
軒に当つて碧樹人より秀づ
吾が詩学の渾て旧に仍るを咲ふも
蕉らず心日々新なり

雨後 枕山(印)(印)

12、

(印)

重_キ如_ク九_ノ鼎_ノ有_リ誰_カ扛_グ
一_ニ望_ミ威_風万_ノ木_ノ降_ル
老_ノ幹_ニ接_シ陰_ニ龍_ノ得_レ偶_ヲ
新_ノ梢_ノ異_レ色_ニ鶴_ノ来_リ発_ス
孔_ノ程_ノ傾_キ蓋_ヲ当_テ晴_道
蕙_安舜_ノ鳴_レ琴_ヲ隔_リ書_窓
好_ク待_テ茯_苓凝_リ琥_珀
釀_ニ君_ガ長_ノ寿_ノ酒_ヲ千_ノ缸_ヲ
重きこと九鼎の如し誰か扛ぐる有らん
一たび威風を望めば万木降る
老幹陰に接し龍偶を得たり
新梢色を異にし鶴来たり発す
孔程蓋を傾け晴道に当たる(孔程は孔子と程木子)
蕙安舜を鳴らし書窓を隔つ(蕙は舜の臣)
好く茯苓を待ちて琥珀を凝らし
君が長寿の酒千缸を醸さん(缸は缸)

詠_松 次_清人_韻 辛_未之_歲 枕_山序_(印)(印)

13、

(印)

風竹如流水、
風竹流水の如し

許由同此情、
許由と此の情を同うす

不言天下事、
天下の事を言はず

洗耳聽涼声、
耳を洗ひて涼声を聴く

詠竹、
雪江詩屋席上

枕山老人(印)(印)

14、

(印)

不比尋常百姓家、
尋常の百姓の家に比せず

爛聊金蘂領秋華、
爛聊たる金蘂秋華を領す

詞人今日知清貴、
詞人今日清貴を知る

罷賞長安爾如花、
賞するを罷めよ長安爾の如花を(如花は菊の異名)

詠菊、
枕山老民(印)(印)

15、

突兀八万尺

突兀八万尺

磅礮六十州

磅礮六十州

戴将大古雪

将に大古の雪を戴き

鎮此万斯秋

此に万斯の秋を鎮む

癸巳七月

録詠岳小絶

鹿門道人千仞

(印)(印)

16、

(印)

出烟霞又入烟霞

烟霞より出でて又烟霞に入る

不覚関山客路除

覚えず関山の客路除きを

東風容易吹我去

東風容易に我を吹いて去り

一春看了両都花

一春看了る両都の花

西遊雜詩之一

湖山醉翁(印)(印)

17、

墜黄^ま 応^ま 満^ま 地^ま 墜黄^ま 応^ま に地^ま に満^ま つべし

徹^ま 曉^ま 振^ま 林^ま 風^ま 徹^ま 曉^ま 林^ま を振^ま はす風

也^ま 自^ま 携^ま 箕^ま 帚^ま 也^ま 自^ま ら箕^ま 帚^ま を携^ま へ

奚^ま 唯^ま 役^ま 僕^ま 僮^ま 奚^ま 唯^ま 僕^ま 僮^ま を役^ま さんや

寒^ま 声^ま 僧^ま 夢^ま 外^ま 寒^ま 声^ま 僧^ま の夢^ま の外

小^ま 劫^ま 爨^ま 烟^ま 中^ま 小^ま 劫^ま 爨^ま ぐ烟^ま の中

昨^ま 日^ま 秋^ま 光^ま 麗^ま 昨^ま 日^ま 秋^ま 光^ま 麗^ま し

誰^ま 知^ま 覺^ま 醉^ま 紅^ま 誰^ま か知^ま らん覺^ま 醉^ま の紅

掃葉 雲如山人

18、

(印)

幽圃^ま 黄葩^ま 接^ま 綺叢^ま 幽圃^ま の黄葩^ま 綺叢^ま に接^ま し

玉梢^ま 翠幹^ま 冷^ま 雲中^ま 玉梢^ま 翠幹^ま 雲中^ま に冷^ま ゆ

若^ま 是^ま 人^ま 世^ま 論^ま 其^ま 品^ま 若^ま し是^ま れ人^ま 世^ま 其^ま の品^ま を論^ま ぜば

應^ま 是^ま 商^ま 山^ま 四^ま 皓^ま 翁^ま 應^ま に是^ま れ商^ま 山^ま 四^ま 皓^ま の翁^ま なるべし

於^ま 漫^ま 作^ま 是^ま 枕^ま 山^ま 老^ま 民^ま (印) (印)

19、

(印)

晚雲合処電光開

晚雲合する処電光開き

豈寅詩情被二雨催

豈詩情の雨に催さるるを寅しまんや

嗟仰雷車殊可孜

嗟いて雷車を仰ぎ殊に孜むべく

車声近自晃山来

車声近づき晃山より来る

聞雷有感 枕山老人(印)

20、

(印)

森鬱敷陰碧一区

森鬱として陰を敷ね碧一区

巋然魯殿幾曾殊

巋然として魯殿と幾ぞ曾て殊ならんや

木公元自居尊爵

木公元自ら尊爵に居り

下視秦皇五大夫

下つて秦皇の五大夫に視ふ

詠松

癸未之秋

枕山叟(印)(印)

21、

(印)

沙白く松青くして景物妍なり
 漁家黙して綴ね清川に俯く
 瓜の蒔芋の圃多くの地無し
 月の渚風の湾一天を別つ
 人は半頭を露はして籬外に立ち
 鷺は独足を挙げて水中に眠る
 莎衣未だ遂げず平生の志
 回首を江湖に回して釣船に愧づ

題画 枕山叟(印)(印)

22、

(印)

釣耕の家世に編る民籍に
 誤つて詩画を学び田を力るを廢す
 辛苦臆問に何の獲る所ぞ
 聴間に辛苦して何の獲る所ぞ
 青燈賺我十余年
 青燈我を賺くこと十余年

偶賦 松塘 (印) (印)

23、

酌_シ酒_ヲ會_ヒ臨_ミ泉水_ニ酒_ヲ酌_ンで會_ヒ泉水_ニ臨_ミ

抱_キ琴_ヲ好_シ倚_ル長_シ松_ニ琴_ヲ抱_キて好_シんで長_シ松_ニ倚_ル

南園_ノ露_ヲ葵_ノ朝_ヲ折_リ南園_ノ露_ヲ葵_ノ朝_ヲ折_リ

東谷_ノ黄_シ梁_ノ夜_ヲ春_ク東谷_ノ黄_シ梁_ノ夜_ヲ春_ク

王右丞田園樂 秋巖原峯書 (印) (印)

24、

閑樂 待宵坊輝山 (印) (印) (上)

椿山人写 (中右図)

神鸞_ヲ失_ヒ其_ノ友_ヲ有_リ隨_フ塵_ノ雀_ノ居_ル林_ノ斎_ノ逸_ノ史

高隆古 (印) (中一雀図)

道理_ヲ貫_キ心_ヲ肝_ニ忠_シ義_ヲ填_ム骨_ノ髓_ニ鴨_ノ厓_ニ (中左)

江雨道人写 (印) (下右)

明窓_ノ淨_ノ几_ニ在_リ宿_ノ契_ニ弘庵_ノ大_ノ雅_ノ (印) (印) (下左)

25、

(印)

春水満湖蘆葦青、
春水湖に満ちて蘆葦青く

鯉魚吹浪水風腥、
鯉魚浪を吹きて水風腥し

舟行未だ見初更の月、
舟行未だ見ず初更の月

一点漁燈落遠汀、
一点の漁燈遠汀に落つ

明治十二年

二峯処士(印)

26、

海開湯沐邑、
海は開く湯沐の邑

噴薄鑛泉靈、
噴くこと薄し鑛泉の靈

山氣鴻濛白、
山氣鴻濛として白く

潮痕上下青、
潮痕上下青し

日暄梅半落、
日暄く梅半ば落ち

雲嬾鳥呼醒、
雲嬾く鳥醒を呼ぶ

便好振衣去、
便ち好し衣を振ひて去らん

魚碕一再経たり、
魚のいる岩場

熱海客楼用、
春畝侯相所示、
竹添井居士詩韻

丁未 即、賦_レ口占_ニ文字雖_モ拙_{ナリ}海郷風物不能_レ出_ル於_レ此外_也
丙午 一月念二日
槐南森大来

27、

(表)

大日本東京市

麹町区永田町一丁目十九番地

森 泰二郎 宅

清国北京 同人

九月十八夜

(裏)

御端書申遣候。去十四日北京ニ入り公使館ニ館ス。此表ノ詳況ハ本日永阪ヘ向ケ一細書差
出候付、聞合申候ハ、尤妙ナリ。兎モ角モ至極健康可_レ為_ニ安堵_一、滞留ハ先ツ二週間ノ積ニ
テ、明後廿日ニハ参内謁見被_ニ仰付_一候。手紙ハ上海ノ領事館若シクハ郵船会社ヘ向ケ出スベ
シ。此端書着次第可_レ成早キヲ要ス。草々

28、

浩氣還_レ太虚_ニ

浩氣太虚に還り

丹心照_ス千古_ニ

丹心千古を照らす

生平未_レ報_セ恩_ニ

生平未だ恩を報ぜず

留_メ作_シ忠魂_ヲ補_ヒ

忠魂を留め作して補ひとす

七十五翁

栗園散人和_レ録_ニ楊繼盛_ノ詩_ニ

(印)(印)(印)

29、

(印)

柳郭_ノ行馬_ノ柵_ニ。鳥驚_ニ護花_ノ鈴_ニ。万花埋_メ麓_ノ寺_ニ。隱翳_ニ百娉_ノ婷_ニ。彩

幕珠簾_ノ連十里_ニ。有_レ魚有_レ酒多_シ且_シ旨_ニ。英雄自_レ酬_ニ一生_ノ勞_ニ。誰把_ニ

隋煬唐明_ノ比_ニ。君不_レ見_ニ四海_ノ爭_ニ溱_ノ藪_ノ百春_ニ。京洛山川_ノ没_ニ戰塵_ニ。

至尊_ノ供御_ノ不_ニ時_ニ給_ニ。黎庶_ノ生理_ノ太艱_ニ辛_ニ。天悔_ニ禍乱_ノ降_ニ英雄_ノ。東

伐西征_ノ草靡_ノ風_ニ。一朝_ノ父老_ノ見_ニ衣冠_ニ。聚洛殿_ノ上_ニ万国_ノ同_ニ。妖氛

銷_レ尽_ニ祥雲_ノ蕩_ニ。挽_レ回_ニ大千_ノ花_ノ世界_ニ。内_ニ与_ニ億兆_ノ樂_ニ太平_ニ。雄氣更_ニ

吞_ニ溟海_ノ外_ニ明韓_ノ不_レ敵_ニ神兵_ニ。戎蕃_ノ使_レ奉_ニ琛源_ノ来_ニ。至_レ今_ニ洋夷_ノ畏_ニ

我_ノ武_ノ。賊艦_ノ窺_レ辺_ニ徒然_ニ回_ニ。豎儒_ノ常_レ理_ニ論_ニ英雄_ノ。眼孔_ノ如_レ豆_ノ妄_レ貶

責_ニ。一生_ノ之_レ勞_ノ一日_ノ娛_ニ。不妨_ニ風流_ノ入_ニ画_ノ図_ニ。一生_ノ之_レ勞_ノ百世_ノ沢_ニ。

桜雲長護^二 天王国^一。

題^二醍醐花宴^一 函^二 鍊研学人齋藤漁(印)(印)

柳は行馬の柵を郭し、鳥は護花の鈴を驚かす。万花麓寺を埋め、隠翳百たび娼婷たり。彩幕珠簾連なること十里。魚有り酒有り且旨多し。英雄自ら一生の勞を酬ふ。誰か隋煬唐明を把つて比へんや。君見ずや四海榛藪を争ふこと百春。京洛の山川戦塵に没し、至尊の供御時に給せず。黎庶の生理ただ艱辛す。天禍乱を悔み英雄を降す。東伐西征草風に靡く。一朝父老衣冠を見え、聚洛殿上に万国同まる。妖氛銷尽し祥雲蕩く。大千花の世界を挽回し、内には億兆と与に太平を楽しむ。雄氣更に溟海を呑む。外には明韓神兵に敵せず。戎蕃の使琛を奉じて源々として来る。今に至るも洋夷我が武を畏れ、賊艦辺を窺ふも徒然として回る。豎儒常理もて英雄を論じ、眼孔豆の如く妄りに貶責す。一生の勞一日の娛み、風流の画図に入るを妨げず。一生の勞百世の沢、桜雲長く天王の国を護らん。

大沼枕山

文政元年（一八一八）江戸に生まれる。父竹溪は幕吏で、詩人として名があつた。名は厚、字は子壽。捨吉とも称した。台嶺の別号をもつ。梁川星巖の玉池吟社の門人とし、大窪詩佛・菊地五山ら亡父の友人の知遇を得、また、遠山雲如・小野湖山・鱸松塘らとともに学んだ。宋詩の清新な詩風を鼓吹し、好んで詠物・詠史の作を試み、独自の風を拓いた。嘉永初年（一八四八）下谷御徒町三枚橋畔に下谷吟社を起し、やがて、幕末・明治初期の詩壇に覇を唱えるに至つた。幕末の政情多難の中で、超然と詩人を以て自ら任じ、無用に徹することでも有用の世界の擬制を暴露しようという文学的姿勢を崩さなかつた。多摩の豪農らには門下生となり、漢詩の指導をおして大きな影響を受けたものが多いという。明治二十四年（一八九一）暗闇坂の新居に歿した。享年七十四である。

森田友昇

天保五年（一八三四）三月十六日、森田与八の二男として福生村に生まれた。本名は森田太郎。森田家は江戸時代から明治期にかけて寺小屋「中福生大学」を開いている。友昇は、在村の俳人・福泉舎友甫に俳諧の手ほどきを受け、後に江戸の宗匠・富所西馬の門に入って更に学んだ。その後、八王子、横浜に居を移し、明治八年（一八七五）に『横浜地名案内』を刊行

し、明治十二年（一八七九）には『浅川集』を梓行している。

『浅川集』は、友昇が松原庵四世を襲名した折の披露の句集で、序文は平塚梅花が選し、書は野津田村の蟠齋石坂昌孝である。俳人はもとより大沼枕山、平塚梅花をはじめ、女流画家・奥原晴湖など様々な文人と交友があつた。明治二十七年（一八九四）友昇六十一歳の年、行脚の草鞋をはいたまま再び還ることはなかつた。

平塚梅花

文化六年（一八〇九）江戸に生まれる。遠山雲如、大沼枕山、小野湖山らと交友し、明治初年に横浜へ移住した。明治九年（一八七六）以降、度々、野津田村の石坂昌孝を訪れ詩を賦し、石坂の案内で次々と多摩の里の詩友を訪れ、吟詩の会をもつた。梅花は明治九年から十六年（一八八三）にわたり五回多摩の里を訪れている。平塚梅花と多摩梅花同人の交流は、遠山雲如とその門人達との関係に匹敵するといわれる。平塚の漢詩集は『秋錦山房詩鈔』がある。

石坂昌孝

天保十二年（一八四一）多摩郡野津田村に生まれ、母方の石坂又二郎家の養子となつた。幼名は高之助。若くして名主を勤め、明治六年（一八七三）に神奈川県第八大区区长となり、村落の文明開化政策を実施し、明治十年代の神奈川県自由民権運動の最高指導者となつた。明治二十三年（一八九〇）の第一回

衆議院議員に当選し、以来二十九年（一八九六）まで代議士を続け、群馬県知事を最後に政界から隠退した。明治八年（一八七五）頃、公職から遠ざかった時期に漢詩、和歌、俳諧等の文雅の道をたしなむが、特に、横浜の老漢詩人・平塚梅花を師とし、多摩梅花同人達と漢詩壇を形成し、自己の思想・志を漢詩によって表現した。書は、同じ野津田村の村野常右衛門らと能書家・真下晚菘に学んでゐる。石坂昌孝の長女・美那子は、北村透谷夫人である。明治四十年（一九〇七）六十六歳で歿した。

小野湖山

文化十一年（一八一四）に近江国に生まれる。旧姓を横山と言ひ、のちに改めて小野と称した。天保三年（一八三二）十九歳のときに江戸に出て、梁川星巖の玉池吟社に入って詩を学び、大沼枕山、遠山雲如、鱸松塘らの社中の人々と親交を結んだ。嘉永六年（一八五三）三河吉田藩の儒員となるが、安政の大獄の際に八年間禁錮幽屏された。明治維新後、総裁局権少参事に任ぜられたが、三ヶ月で辞任してゐる。明治四十三年（一九一〇）九十六歳で歿した。

遠山雲如

文化七年（一八一〇）に生まれる。本姓は小倉氏、遠山は母方の姓。大沼枕山、小野湖山、鱸松塘らより少し年長の、梁川星巖の玉池吟社を代表する詩人。同社中の竹内雲濤に劣らぬ奇

人の風格をそなえ、江戸に落ち着いてゐることができず、絶えず諸方を彷徨し、嘉永五年（一八五二）から安政四年（一八五七）の間、相模、多摩に居住した。この間、多摩の豪農らに漢詩を教え大きな影響を与えた。文久三年（一八六三）五十三歳、京都で歿した。

鱸松塘

文政六年（一八二三）安房国に生まれる。本姓鈴木氏。家は代々半農半漁の生活を送っていたが、父道順は医者を兼ね、家産は豊かであった。天保九年（一八三八）の春、大沼枕山は房州に遊び、鈴木氏を訪れてゐる。以後、梁川星巖、鷲津毅堂などが、しばしばかなり長期間寄寓してゐる。天保十年、松塘十七歳のときに梁川星巖の玉池吟社社中となった。明治三年（一八七〇）松塘は上京して浅草向柳原に居を移し、七曲吟社を起してゐる。旅を好み、後半生は旅寓に日々を送った。明治三十一年（一八九八）七十五歳で歿した。

森槐南

文久三年（一八六三）に生まれる。名は大来、字は公泰。泰二郎と称した。父は、枕山と明治初年の漢詩壇を二分した森春濤である。明治十四年（一八八一）、槐南二十一歳の時に太政官修史館に出仕する。以後、宮内大臣秘書官、式部官などを歴任し、伊藤博文の側近となる。詩人としての技倆も卓越し、枕

山、春濤なき後の詩壇に巨歩を占めた。明治四十二年（一九〇九）伊藤博文のハルビン遭難の際、隨行して銃創を負った。明治四十四年（一九一〇）四十八歳で歿した。

岡鹿門

天保四年（一八三三）——大正二年（一九一三）。明治三年（一八七〇）に私塾・綏猷堂を開く。

関雪江

文政九年（一八二六）——明治十年（一八七七）。大沼枕山の下谷吟社より出た詩人。

福島柳園

鈴木小塘の七曲吟社より出た詩人。

中村栗園

帆足萬里の門人、明治十四年（一八八一）歿。

齊藤拙堂

古賀精里の門人、慶応元年（一八六五）歿。

謝辞

展示資料の翻字、及び読解を成城大学文芸学部 尾形 侑教授、同 朽尾 武教授、同 大学院 宮脇真彦氏に御依頼いたしました。深甚の謝意を表します。

参考文献

文中において参考及び引用の文献をいちいち明示しませんでした。次の文献を参考及び引用したことを記して感謝申し上げます。

『明治漢詩文集』 筑摩書房

『下谷叢話』 永井荷風 岩波書店

『幕末維新期の文学』 前田愛 法大出版局

『明治の文化』 色川大吉 岩波書店

『江戸後期の詩人たち』 富士川英郎 筑摩書店

『私の古典』 中村真一郎 岩波書店

『村落の明治維新研究』 渡辺奨 三一書房

『民権史を探る』 武相民権運動百年記念実行委員会

『化政期詩人の地方と中央』 揖斐高『文学』一九七八・六

『江戸末期の地方文芸への一視点』 齊藤慎一 『東国民衆史』創刊号

『青梅の漢学者「根岸典則」伝序説』 齊藤慎一 『多摩郷土研究』五七

『化政期多摩俳諧の形成と展開』 赤坂六郎『多摩のあゆみ』37

漢詩人・大沼枕山

— 俳人友昇をめぐる人々 —

昭和60年2月1日発行

編集 福生市郷土資料室

発行 福生市教育委員会

福生市熊川八五〇―一

福生市郷土資料室

第一卷 雜錄
卷之四 雜錄
卷之五 雜錄
卷之六 雜錄
卷之七 雜錄
卷之八 雜錄
卷之九 雜錄
卷之十 雜錄